様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２５１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2019
課題番号：２６３８０９４８

研究課題名（和文）配偶者をがんで亡くした遺族のうつ病予防を目的とした対処強化介入の効果検証

研究課題名（英文）Development of bereavement care program for the prevention of major depressive disorders among the spouses of cancer patients

研究代表者
浅井　真理子（ASAI, Mariko）

帝京平成大学・臨床心理学研究科・准教授

研究者番号：５０５８１７９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では2つの研究を実施し、以下の3つの結果を得た。遺族を対象とした介入研究のメタアナリシスの結果、1）有効なプログラムを開発するためには対象はスクリーニングで重症者を選択したのち、介入は個別でCBTを含めることが必要であることが示唆された。死別前から死別後までの縦断調査の結果、2）参加率が低く実施可能性は低かったことから、死別前のアクセスに際しては課題が残された。また 3)死別6か月後以降の抑うつが増大する時期に介入を実施することでうつ病を予防できる可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究による成果の学術的および社会的意義としては、遺族を対象とした介入研究のメタアナリシスおよび死別前からの縦断調査を実施することによって、配偶者をがんで亡くした遺族のうつ病予防を目的とした対処強化介入に関して、有効性および実施可能性の高いプログラムに関する知見が得られ、今後のプログラム開発および全国の遺族への普及までつながることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we investigated two studies and identified three results. Meta-analysis of studies that evaluate interventions for the bereaved showed that 1) it was necessary to select the bereaved who have severe grief symptoms and to conduct individualized cognitive behavioral therapy for development of effective program. Longitudinal study among cancer patients and their caregivers who received palliative care showed that 2) accessibility of spouse in palliative care setting remained an issue and that 3) sixth months after of bereavement during a period of increasing depressive symptoms was assumed to be suitable for the starting program that could prevent major depressive disorders among the spouse.

研究分野：臨床心理学

キーワード：がん　遺族　うつ病

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）配偶者をがんで亡くした遺族の国内外の研究動向に関しては、米国ではがん患者の介護者の中で配偶者は死別後にうつ病を発症するリスクが高いことが報告されてきた[1,2]。一方,国内では配偶者をがんで亡くした遺族が１年間に約 20 万人（男性約 5 万人, 女性約 15 万人）にも及んでいる[3]。
また配偶者を亡くした遺族を対象とした国内外の先行研究を概観した結果[4]、国外では個人対象は曝露療法[5]、集団対象は家族療法[6]や対処教育[7]が無作為化比較試験（RCT）で有効性が検証されていたものの、国内ではうつ病予防に有効な遺族ケアプログラムの報告はなかった。

（２）研究者らのこれまでの研究成果としては、配偶者をがんで亡くした遺族 24 名を対象とした面接調査[8]で得た構成要素を用いて質問紙を作成し,死別後 7 年までの配偶者をがんで亡くした遺族 821 名を対象とした質問紙による実態調査を実施した。死別後の心理状態は“不安／抑うつ／怒り（否定的）”,“思慕（やや否定的）”,“受容／未来志向（肯定的）”の 3 因子構造,対処行動は“気そらし”,“絆の保持”,“社会共有／再構築”の 3 因子構造であった。また対処行動は心理状態の第１の関連要因であり,介入標的と考えられた[9]。
また遺族の精神的不健康の実態 精神医学的障害（GHQ28 の神経症のカットオフ値である 6 点以上）の有症率および関連要因を検討した。その結果,有症率は 44%（360/821 名）であった。配偶者が‘55 歳未満(71%)’や‘死別後 2 年(59%)’で有意に高く,性別では‘女性’が高いものの有意差はみられなかった。以上より,死別後７年まで経過した遺族の約半数は精神的に不健康（適応障害からうつ病相当）であり,うつ病予防を目的とした介入の必要性が示唆された[10]。
さらに遺族の精神的不健康と対処行動パターンとの関連を検討した結果、配偶者をがんで亡くした遺族の対処行動パターンは 3 つに分類され人数もほぼ均等であった。“気そらし”は行うものの“絆の保持”や“社会共有／再構築”が少ない“気そらし焦点型”(n = 215, 33%),“ 絆の保持”は行うものの“気そらし”や“社会共有／再構築”が少ない“絆の保持焦点型”(n = 219, 34%), いずれの対処行動も積極的に行う“全般対処型”(n = 215, 33%）と解釈でき、不健康的な対処行動パターンは“絆の保持焦点型”のみであった[11]。

２．研究の目的

研究開始当初の目的は、研究者らのこれまでの研究成果を用いて、配偶者をがんで亡くした遺族のうつ病予防を目的とした対処強化介入プログラムを新規に開発し、その効果を検証することであった。しかしながら、研究者間で国内外の先行研究を調査した結果、プログラムの構成要素（介入要素、実施形態、対象の重症度）およびプログラムの実施方法（アクセスと介入の時期）に関しては知見が不十分であり、対処強化介入プログラムの有効性および実施可能性を高めるために、本研究では以下の２つの目的に変更して実施した。（１）遺族を対象とした介入研究のメタアナリシスを実施することによって、プログラムの構成要素を探索する。（２）死別前からのがん患者とその介護者を対象とした縦断調査によって、プログラムの実施方法を探索する。

３．研究の方法

（１）プログラムの構成要素の探索
遺族を対象とした介入研究のメタアナリシスを以下の方法で実施した。データーベースとして PubMed、PsycARTICLES、Web of Science、医中誌 Web を使用し、検索期間は 2000 年１月１日から 2016 年 6 月 30 日までとした。適格基準は、①介入対象は大切な人（配偶者、一親等内の家族、胎児など）を亡くした経験がある 18 歳以上の遺族、②心理的社会的介入を行っている、③無作為化比較試験（RCT）であり待機群もしくは通常ケア群を設定している、④抑うつまたは悲嘆の評価尺度を用い介入前後で測定している、⑤分析に必要な統計データが記載されている、とした。メタアナリシスは Review Manager Version 5.3 で変量効果モデルを採用し、効果量として Standard Mean Difference（SMD）と 95%信頼区間（95%CI）を算出した。効果量の分類は Cohen を参考に, 0.1 未満：「なし」, 0.2 前後：「小」, 0.5 前後：「中」, 0.8 以上：「大」と分類した。効果量は対象論文全体に加え、介入要素（認知行動療法（Cognitive Behavioral Therapy、以下 CBT）/CBT 以外)、実施形態（個別/グループ/家族単位)、対象の重症度によるスクリーニングの有無に分けて算出した。

（２）プログラムの実施方法の探索
死別前から死別後までの縦断調査の実施可能性および配偶者をがんで亡くした遺族の抑うつ評価を以下の方法で実施した。尚、実施に先立ち研究実施施設である国立がん研究センターで倫理審査委員会の承認を得た。この研究の対象は国立がん研究センター東病院緩和医療科の外来を初めて受診した 20 歳以上の進行・再発がん患者とその介護者のペアとし、初診時（T1）は両者への面接調査(認知機能評価として Mini Mental State Examination-Japanese:MMSE-J を含む)、死別 6 か月後（T2）と死別 13 か月後（T3）は抑うつや対処行動を評価するための調査票を含む郵送調査を介護者に実施した。抑うつは PHQ-9（The Patient Health Questionnaire,0－27 点）で評価しカットオフ値は 10 点とした。ノンパラメトリック検定として、対応のある 3 時点の比較は Friedman 検定、相関は Spearman 順位相関係数（ρ）を用いた。

４．研究成果

（１）プログラムの構成要素（介入要素、実施形態、対象の重症度）の探索

データーベースで抽出された論文は、PubMed は 148 件、PsycARTICLES は 215 件、Web of Science は 109 件、医中誌 Web は 238 件、計 710 件であった。これらの論文の抄録内容から 601 件を除外し、適格基準から 86 件を除外した結果、メタアナリシスの対象となった論文は 22 件であった。全ての論文選定の作業は研究者 2 名で実施した。効果量は全体では「中」（SMD：-0.34、95%CI: -0.47 to -0.21）であった。介入要素別では、CBT は「中」（SMD：-0.36、95%CI: -0.49 to -0.21)、CBT 以外は「小」（SMD：-0.29、95%CI: -0.64 to 0.07)であった。実施形態別では、個別は「中」（SMD：-0.47、95%CI: -0.63 to -0.32)、グループは「なし」（SMD：-0.09、95%CI: -0.38 to 0.19)、家族は「なし」（SMD：0.02、95%CI: -0.13 to 0.16）であった。対象の重症度によるスクリーニングの有無では、スクリーニング有は「中」（SMD：-0.51、95%CI: -0.73 to -0.29)、スクリーニング無は「小」（SMD：-0.24、95%CI: -0.39 to -0.08）であった。またいずれの分析でも研究間の異質性は大きかった（I^2:60-84%)。以上より、遺族を対象とした介入研究では、介入要素は CBT、実施形態は個別、対象の重症度によるスクリーニングは有、の場合に「中」程度の効果量がみられ、有効なプログラムを開発するためにはこれらの構成要素（対象はスクリーニングで重症者を選択したのち、介入は個別で CBT を含める）が必要であることが示唆された。

（２）プログラムの実施方法（アクセスと介入の時期）の探索

2014 年 6 月から 2015 年 3 月までにがん専門病院の緩和医療科を受診した進行・再発期のがん患者 130 名のうち、適格者（20 歳以上の進行・再発がん患者であり介護者が当日同伴）は 86 名（適格率 66%）であり、不適格者は介護者が同伴していない 23 名(18%)、進行・再発がんでない 21 名（16%）であった。また適格者のうちで参加者は 31 組（参加率 36%）であり、不参加者は医師が患者の身体状態を調査に耐えられないと判断した 35 名（41%)、患者または介護者が参加希望しなかった 20 名(23%)であった。以上より、本研究では研究への参加率が低かったことから(36%)、実施可能性は低いと判断しエントリーは中断し追跡調査のみ実施した。以上より、がん患者の介護者である配偶者を死別前に研究調査の対象とすることは困難であったことから、遺族プログラムのための死別前から配偶者のアクセスに際しては時期や場所といった諸条件に関して課題が残された。

抑うつに関しては、T3 まで調査完了した 19 名の配偶者の PHQ-9 のデータを解析した。T1 では中央値 5.00、カットオフ値以上は 2 名、T2 では中央値 8.00、カットオフ値以上は 6 名、 T3 では中央値 6.00、カットオフ値以上は 3 名であった。平均ランクは T1 が 1.53、T2 が 2.16、T3 が 2.31 であり、この順位は有意であった（χ^2（2）＝6.86、p＝0.03)。T1 の抑うつは患者の MMSE 得点と（ρ＝-.61、p＝0.01)、T2 の抑うつは気そらしと（ρ＝-.55、p＝0.04)、T3 の抑うつは T1 の抑うつ（ρ＝.79、p<0.01)、T2 の抑うつ（ρ＝.69、p＝0.01）と有意に関連した。以上より、配偶者の抑うつは、緩和ケア初診時、死別 6 か月後、死別 13 か月後の順で増加したことから、死別 6 か月後以降の抑うつが増大する時期に介入を実施することでうつ病を予防できる可能性が示唆された。

＜引用文献＞

1. Bradley EHP、H.G.；Carlson、M. D.；Cherlin、E.；Johnson-Hurzeler、R.；Kasl、S. V. Depression among surviving caregivers: does length of hospice enrollment matter? Am J Psychiatry 2004;161:2257-62.
2. Kris AE、Cherlin EJ、Prigerson HG、et al. Length of hospice enrollment and subsequent depression in family caregivers: 13-month follow-up study. Am J Geriatr Psychiatry 2006;14:264-9.
3. 厚生労働省. 人口動態統計. 2007.
4. 浅井真理子. 配偶者を亡くした遺族の心理状態と対処行動に関する国内外の研究動向. カウンセリング研究 2009;42:71-80.
5. Shear KF、E.；Houck、P. R.；Reynolds、C. F.、3rd. Treatment of complicated grief: a randomized controlled trial. JAMA 2005;293:2601-8.
6. Kissane DWM、M.；Bloch、S.；Moskowitz、C.；McKenzie、D. P.；O'Neill、I. Family focused grief therapy: a randomized、controlled trial in palliative care and bereavement. Am J Psychiatry 2006;163:1208-18.
7. Sikkema KJ、Hansen NB、Ghebremichael M、et al. A randomized controlled trial of a

coping group intervention for adults with HIV who are AIDS bereaved: longitudinal effects on grief. Health psychology : official journal of the Division of Health Psychology、American Psychological Association 2006;25:563-70.

8. Asai M、Fujimori M、Akizuki N、Inagaki M、Matsui Y、Uchitomi Y. Psychological states and coping strategies after bereavement among the spouses of cancer patients: a qualitative study. Psycho-oncology 2010;19:38-45.

9. Asai M、Akizuki N、Fujimori M、et al. Psychological states and coping strategies after bereavement among spouses of cancer patients: a quantitative study in Japan. Supportive care in cancer : official journal of the Multinational Association of Supportive Care in Cancer 2012;20:3189-203.

10. Asai M、Akizuki N、Fujimori M、et al. Impaired mental health among the bereaved spouses of cancer patients. Psycho-oncology 2013;22:995-1001.

11. 浅井 真理子、松井 豊、内富 庸介. 配偶者をがんで亡くした遺族の対処行動パターン. 心理学研究 2013;84:498-507.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Fukumori Takaki, Goto Toyomi, Sato Hiroshi	４．巻 89
２．論文標題 Development, reliability, and validity of a Japanese version of the Professional Quality of Life Scale for Nurses	５．発行年 2018年
３．雑誌名 The Japanese journal of psychology	６．最初と最後の頁 150-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.4992/jjpsy.89.17202	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉良　悠吾、尾形　明子、上手　由香	４．巻 44
２．論文標題 高校生の抑うつとソーシャルスキルの関連性の検討-認知過程スキルの調整効果に着目して-	５．発行年 2018年
３．雑誌名 認知行動療法研究	６．最初と最後の頁 137-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.24468/jjbct.17-194	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hamano Jun, Takeuchi Ayano, Yamaguchi Takuhiro, Baba Mika, Imai Kengo, Ikenaga Masayuki, Matsumoto Yoshihisa, Sekine Ryuichi, Yamaguchi Takashi, Hirohashi Takeshi, Tajima Tsukasa, Tatara Ryohei, Watanabe Hiroaki, Otani Hiroyuki, Nagaoka Hiroka, Mori Masanori, Tei Yo, Hiramoto Shuji, Morita Tatsuya	４．巻 105
２．論文標題 A combination of routine laboratory findings and vital signs can predict survival of advanced cancer patients without physician evaluation: a fractional polynomial model	５．発行年 2018年
３．雑誌名 European Journal of Cancer	６．最初と最後の頁 50-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.ejca.2018.09.037	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Takaki Fukumori, Atsuko Miyazaki, Chihiro Takaba, Saki Taniguchi, Mariko Asai	４．巻 27
２．論文標題 Cognitive reactions of nurses exposed to cancer patients' traumatic experiences: A qualitative study to identify triggers of the onset of compassion fatigue	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Psycho-Oncology	６．最初と最後の頁 620-625
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/pon.4555	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takaki Fukumori, Hiromi Kuroda, Masaya Ito, Masami Kashimura	4．巻 64
2．論文標題 Effect of guided, structured, writing program on self-harm ideations and emotion regulation	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Journal of Medical Investigation	6．最初と最後の頁 74-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2152/jmi.64.74	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 堂谷　知香子・尾形　明子・福森　崇貴・内富　庸介・浅井　真理子	4．巻 12
2．論文標題 遺族ケア　-悲嘆への心理社会的介入-	5．発行年 2014年
3．雑誌名 Depression Frontier	6．最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 浅井　真理子、堂谷　知香子
2．発表標題 遺族に対する心理社会的介入研究の文献展望　―介入要素、形態、重症度による効果の違い―
3．学会等名 日本グリーフ＆ビリーブメント学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 Takaki Fukumori, Atsuko Miyazaki, Chihiro Takaba, Saki Taniguchi, Mariko Asai
2．発表標題 Traumatic events of cancer patients that lead to nurses’ compassion fatigue
3．学会等名 World Congress of Psycho-Oncology（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 Takaki Fukumori, Atsuko Miyazaki, Chihiro Takaba, Saki Taniguchi, Mariko Asai
２．発表標題 Nurses thoughts in response to witnessing the traumatic experience of cancer patients: Frequency of cognitive reactions in the development of compassion fatigue
３．学会等名 19th World Congress of Psycho-Oncology and Psychosocial Academy（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 福森　崇貴
２．発表標題 がん医療領域で研究を行う
３．学会等名 日本心理臨床学会第36回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Maiko Fujimori, Yuki Shirai, Mariko Asai, Noriyuki Katsumata, Kaoru Kubota, Yosuke Uchitomi
２．発表標題 Effect of communication skills training program for oncologists based on patient preferences for communication when receiving bad news: a randomized control trial
３．学会等名 The 31st International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Fukumori T, Goto T, Sato H. Kawabata Y, Asada Y, Hara Y, Sakamoto T, Miyake H
２．発表標題 Development, reliabiity,and validation of a Japaneses version of the ProQOL-5.
３．学会等名 31st International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 浅井　真理子
２．発表標題 がん医療における家族支援
３．学会等名 日本心理臨床学会第 35 回秋季大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 堂谷　知香子・尾形　明子・福森　崇貴・浅井　真理子
２．発表標題 遺族のQOL改善に寄与する心理社会的介入要素の文献展望
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第40回大会
４．発表年 2014年

〔図書〕　計7件

１．著者名 浅井　真理子　他　武田　文和　（監訳）	４．発行年 2018年
２．出版社 医学書院	５．総ページ数 412
３．書名 トワイクロス先生の緩和ケア　死別	

１．著者名 福森　崇貴　他　堀越　勝・安藤　哲也(監訳)	４．発行年 2015年
２．出版社 診断と治療社	５．総ページ数 117（99-106）
３．書名 慢性疾患の認知行動療法ーアドヒアランスとうつへのアプローチ　ワークブックー	

1．著者名 福森　崇貴　他　堀越　勝・安藤　哲也(監訳)	4．発行年 2015年
2．出版社 診断と治療社	5．総ページ数 165（131-138）
3．書名 慢性疾患の認知行動療法ーアドヒアランスとうつへのアプローチ　セラピストガイドー	

1．著者名 福森　崇貴　他　杉江　征・青木　佐奈枝（編）	4．発行年 2015年
2．出版社 サイエンス社	5．総ページ数 327（57-81）
3．書名 スタンダード臨床心理学	

1．著者名 鈴木　伸一　他	4．発行年 2016年
2．出版社 北大路書房	5．総ページ数 312（100-112）
3．書名 からだの病気のこころのケア　チーム医療に活かす心理職の専門性	

1．著者名 鈴木伸一　他	4．発行年 2016年
2．出版社 北大路書房	5．総ページ数 271（69-82）
3．書名 がん患者の認知行動療法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	尾形　明子 (OGATA Akiko) (70452919)	広島大学・教育学研究科・准教授 (15401)	
研究分担者	福森　崇貴 (FUKUMORI Takaki) (50453402)	徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 （総科）・准教授 (16101)	
研究分担者	松本　禎久 (MATSUMOTO Yoshihisa) (30544522)	国立研究開発法人国立がん研究センター・緩和医療科・医長 (82606)	